世界社会の言語

——民族語・共通語から世界語へ——

田　中　みどり

母語という言葉は，民族語・民族意識という概念と結びついて使用されることが多い。

最近，衰退していく民族語もある一方，民族語と民族を尊重しようという動きもある。

各々の民族の文化や言語を大切にした上で，その総ての民族の言語や地域の共通語の上位概念としての，“世界の人々がコミュニケーションをすることのできる一つの言語”を考えたい。商業語・通用語として世界的な広がりをもつ英語が，その世界語の基盤として有力である。

キーワード：言語共同体，共通語，母語，民族の言語，世界語

［1］　共同体の言語

一般に，母語とは，生まれて後，周囲の人が話すものを習い覚え，特別に学習したという記憶のないもの（実は相当の努力をしているのだが），と言うことができる。その言語を用いる集団を言語共同体と言う。

最も原初的な形態のものは，外部との接触がなく，言語がその共同体の内部で完結しているものである。それは，現在でも地球上にいくつかは残っているであろうが，外部との接触がないのであるから，全く未知である。

古い時代を考えるには，ほぼ定説となっているようにヒトはサルから進化したと考える時，サルの世界の在り方やその鳴き声の研究を参考に，ヒトの世界の在り方や言語の在り方を想定することができる。森から出たヒトは，直立歩行し，手を用い，手の延長として道具を作り，獲物を捕えたり木の実を採ったりして雑食し，また，火を用いた。現在私たちが集団を形成して生きているように，森を出た時からヒトは集団を形成していたに相違ない。そこには男がいて女がい，老人がいて乳児がい，集団をまとめる人がい，それぞれの役割があったであろう。

ヒトの音声言語は，サルの鳴き声がそうであるように，第一義的には，仲間に何かを伝達する方法であった。それが，仲間に伝達する方法であるためには，そこに一定の約束ごとがなければならない。音韻・アクセント・イントネーション・語彙・語の意味・文の意味・文法など，その仲間のうちでしだいに形づくられてきたものである。

モノの名前や動作を表わす既成の言葉を覚えるのは，それほど難しいことではないかもしれない。しかし，抽象的な事物を表わす言葉の受けとめ方は，各人の感じ方・ものの見方・経験などによって，モノの名前や動作を表わす言葉以上にズレが生じて来る。私がある意味で使う語を，彼は別の意味で使い，彼女はまた別の意味で使う。――それぞれにズレている各人の言葉の公約数を軸として，各人の言葉を総て合わせたもの，それが共同体の言語と言えるであろう。

今，単語 X について考えてみる。

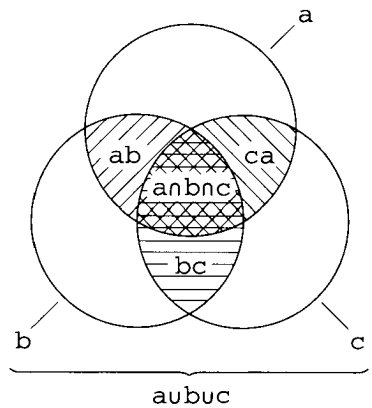
単語 X は，X_1・X_2・X_3……など，さまざまな意味で用いられるが，言語者 A の用いる意味領域を a，言語者 B の用いる意味領域を b，言語者 C の用いる意味領域を c，……とし（単純化のため，言語者を A・B・C で代表させ，D 以下を省略する。），a と b のみ・b と c のみ・c と a のみの重なり合う部分をそれぞれ ab・bc・ca，a と b と c の重なり合う部分を a∩b∩c，a と b と c の総合を a∪b∪c と呼ぶことにする（**図１**）。

a∩b∩c の領域の意味は最も公的・一般的なものであり，これが共同体の言語の軸となる。

ab・bc・ca の領域の意味は二者間のみに通用して第三者には通用しないもの，すなわち，家庭の中や友人間でのみ通用する私的なものであるが，二者の間では認められている点，半公半私と言ってよいだろう。

そして，a と b と c が他と重なり合わない部分は，誰にも通用しない全く私的なものである。

ところが，言語者 A が独自に使用した X の意味 Xo を，言語者 B が言語者 A とのコミュニ



［**図１**］

ケーションに用いることがある。この時 Xo は ab に含まれることになり，すなわち，ab はその意味領域を広げることになる（**図 2**）。

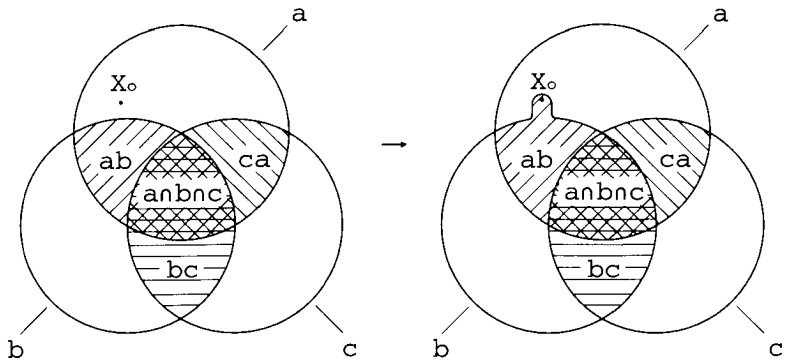
さらに，言語者 A が独自に使用していた X の意味 Xp が a∩b∩c の中にもちこまれ，言語者 B・言語者 C もそれを使用することになる場合がある。この時 Xp は a∩b∩c に含まれることになり，a∩b∩c はその意味領域を広げることになる（**図 3**）。

また，言語者 A と言語者 B の間で通用し，ab の領域にある X の意味 Xq を言語者 C が知り，自分の意味領域の中にとり入れることがある。この時 Xq は a∩b∩c に含まれることになり，a∩b∩c はその意味領域を広げることになる（**図 4**）。

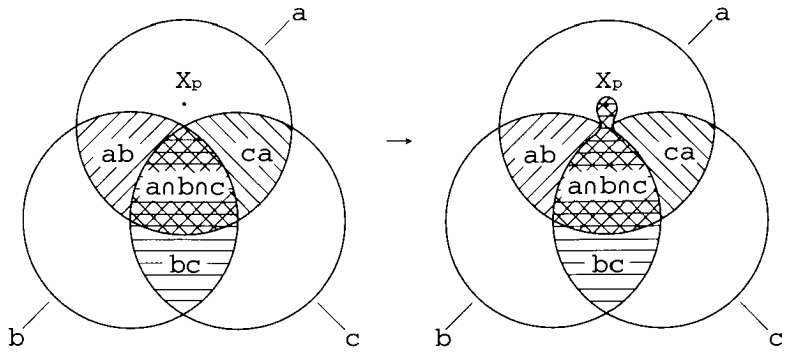
あるいはまた，a∩b∩c の領域にある X の意味 Xr を，言語者 A も言語者 B も言語者 C も使用しなくなることがある。この場合は，a∩b∩c はその領域を狭めることになる（**図 5**）。

同様に，言語者 A と言語者 B の間で通用していた，ab の領域にある X の意味 Xs を，言語者 B が使用しなくなる時には，ab の領域が狭くなり（**図 6**），言語者 A の独自の使い方であった X の意味 Xt を，言語者 A も使用しなくなる時には，a の領域が狭くなる（**図 7**）。

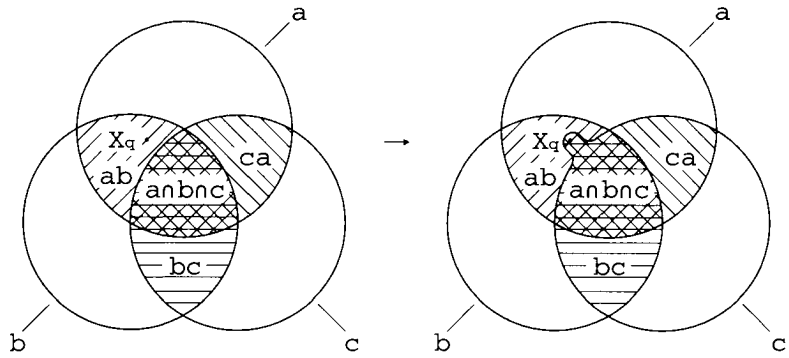
言語者が三人しかいない場合であっても，人によってその感じ方・ものの見方・経験が異なるのであるから，上に述べたことは必ず起こり，単語 X の意味は時とともに変化する可能性



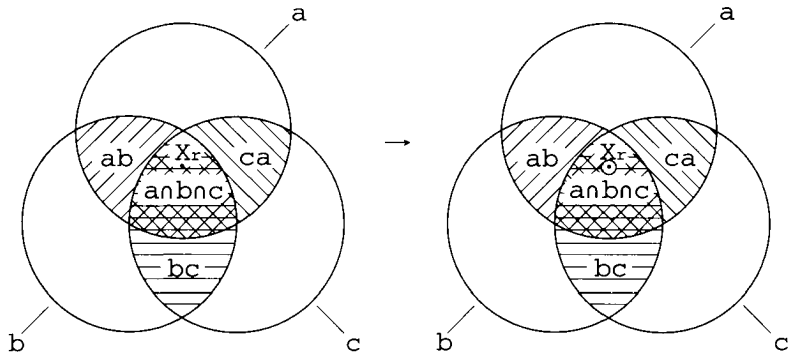
［**図 2**］



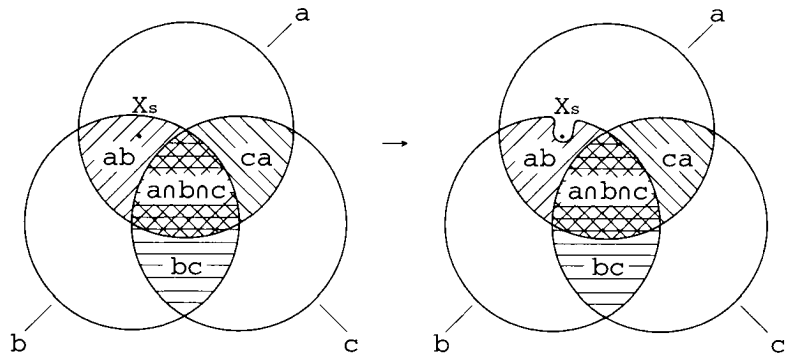
［**図 3**］



［図４］



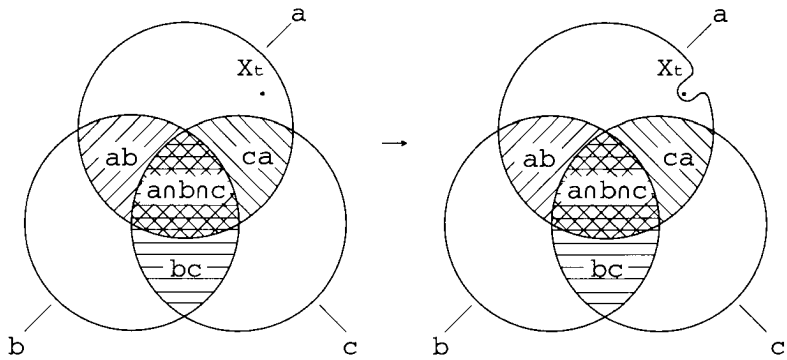
［図５］



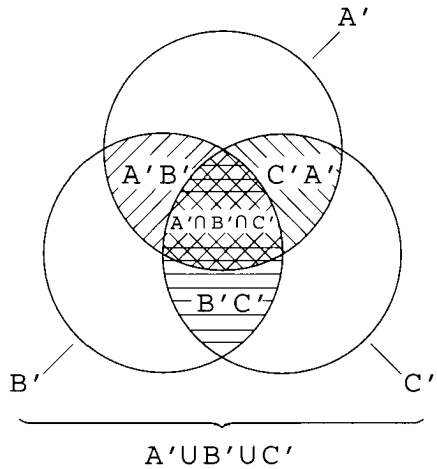
［図６］

をもっている。まして，一つの集団は三人以上から成るわけであるから，より複雑に，より多く，その可能性をもっているわけである。

以上のことは，語の意味に限らず，語彙や文の意味・音韻・アクセント・イントネーション・文法などについても同じことが言え，さらには，言語者 **A**・言語者 **B**・言語者 **C** それぞれの言葉遣い **A′**・**B′**・**C′** についても同じことが言える（**図８**）。



［図7］



［図8］

さきに，「それぞれにズレている各人の言葉の公約数を軸として，各人の言葉を総て合わせたもの，それが共同体の言語と言えるであろう。」と述べた。公的な言葉（公約数）のみならず全く私的な各人の変種の総てさえも共同体の言語としたのは，以上に述べたように，私的な言葉も公的な言葉に組み入れられることがあり，何よりも，言葉とは個々独立した各人の個人的なものであるからである。**図1**に示したような意味のズレを，言語者 **A** が客観的に把握しきることはなく，部分的に気づき，そのうちの特別なもののみ**図2**・**図3**・**図4**・**図5**・**図6**・**図7**に示した事態が起きることがあるのであって，ほとんどの場合，言語者 **A** は自分の意味領域 **a** ないし言葉遣い **A′** の範囲内で，言語者 **B** や言語者 **C** の言葉を把えてしまっているのである。

人は，生来の性格によっても，ものごとの感じ方・受けとめ方が異なる。

また，各々の人は，その生育地・居住地・階層・教育・職業や世代，また，それぞれの経験

など，さまざまな条件の下に生きており，それらの条件と関連して，言語を形成していく。

そのうちのひとりを父とし，ひとりを母として，その他にも何人かの家族や隣人・父母の友人 etc. の形づくる環境の中に，人は生まれるわけであるから，生まれた時から，人それぞれの言語環境はすでに異なっており，その後の経験と相俟って，おのずとその言語も異なった様相を示すことになる。

それでも，人が言語によって他者との間に意志の疎通をはかることができるのは，各人の言葉はバラバラでありながらも，そこに共通性・共同性を認めているからである。

言葉とは，たとえば，ここに白い紙があったとして，ヒトの目の構造に個人差があるため，私が見ているのと全く同じ明度・彩度に他人にも見えているということはないが，それを「白い」という一言で表わしてしまって何ら不都合を生じない程度の，大まかな概念化手段でしかない。さまざまにある [u] なら [u] の音声を，/u/ という一つの音韻に還元してしまうことのできる能力と，その能力は同じものである。

そうして私たちは，各人のバラバラの言葉の中に，共通性・共同性を見出だすのである。それが，具体的には，公約数的な言葉となっていく。

公約数的な言葉を狭義の共同体の言語と呼び，各人の言葉の総体を広義の共同体の言語と呼んでよいだろう。

［2］　方言と共通語

［2・1］　方　言

ヒトの集団には，男がいて女がい，老人がいて乳児がい，集団をまとめる人がい，それぞれの役割がある。そこに位相による言葉の違いが生じる。言語者 A・言語者 B・言語者 C の言葉遣い A′・B′・C′ に，それは反映される。

一方，共同体が大きくなって小集団ずつに分かれて居住するようになると，それぞれの小集団はその内部でそれぞれに言語の展開をしていくことになる。元は同じでありながら，個人のみならず，その集団の在り方・環境・経験はそれぞれに違っていき，それに伴なってその言語も，変化したり新語を造り出したりして，異なったものになっていく。

位相語は，たとえば男言葉と女言葉で会話をする場合のように，共同体内で互いに理解し合って使用しているものもあれば，職業用語のように，限られた仲間の内部だけで使用するものもある。前者の場合には，自分は使用することはないが，他者が使用するのを理解することのできる言葉として，自らの言語領域の中に蓄えられている，という点に注意する必要がある。

元を同じくする地域方言同士の場合，方言と言える程度の違いであれば，そこに隔りはあっても，全く理解できないわけではない。

1．音韻やアクセント・イントネーション・語彙・語の意味・文の意味に異なったもの・変化したものがあっても，変化していない元の形を残しているものもあり，

2．とりわけ発音やアクセント・イントネーションにおいては，変化したものはバラバラではなく，変化の仕方に一定の法則があることが多く，

3．また，語順など骨格の文構造はほとんど変化しない

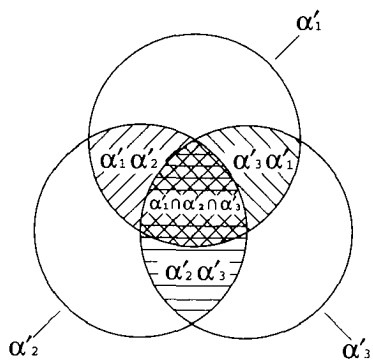
ので，理解し易いのである。

［2・2］　自然発生的共通語

しかしながら，方言集団 α_1 と方言集団 α_2 との間に親交がかわされたり，物々交換をはじめとして交易が行なわれるようになったりした時，言語がズレているとコミュニケーションがスムーズに運ばない。そこで，両者の接する分野の言葉を中心に，言語が浸透し合って，互いに通用する言語ができ上がっていく。両者の関係が対等であれば，そこにでき上がる言語は両者の入り混じったものになるが，一方が経済的に優位に立っていたり文化的に優れていたりする時には，その優れた方の集団の言語が核となり易い。

方言集団 α_1 が接触する集団が，分野ごとに，方言集団 α_2 であったり方言集団 α_3 であったり様々であると（その言語　α_1'・α_2'・α_3'），それぞれの言語との間に互いに通用する言語をもち，それが他の方言集団にも間接的に影響を与えることもあり，また同様にして，自身の接触していない方言集団の影響を間接的に受けることもある。そのようなことが複合して，交流のあるいくつかの方言集団の間で共通に使用される言語（共通語）ができ上がっていく（**図9**）。

集団の接触は，交易を筆頭に公的なものであることが多いため，共通語が覆うのは公的な部分に関することが中心となり，私的な日常語や風習に関わる用語などが組み入れられるのは，後の段階になりやすい。私的な言葉が他の集団に伝わったとしても，それはあくまで私的なレヴェルでの交流にとどまり，風習は土地に根ざしたものであるから，それに関わる用語も独自のものを保持しやすいからである。



［**図9**］

［２・３］　全国共通語

共同体の分母が，自然発生的な小集団からいくつかの方言を擁する集団に成長すると，集団α_1と集団α_2・集団α_3の言語α_1'・α_2'・α_3'の重なる部分$\alpha_1'\cap\alpha_2'\cap\alpha_3'$がそれらの自然発生的な共通語となり，さらに少し異なった方言集団β_1・β_2・β_3，γ_1・γ_2・γ_3などが統合して一国を形成する時には，それぞれの自然発生的な共通語$\alpha_1'\cap\alpha_2'\cap\alpha_3'$・$\beta_1'\cap\beta_2'\cap\beta_3'$・$\gamma_1'\cap\gamma_2'\cap\gamma_3'$のうちの１つが全国共通語の母体となるが，この時には標準語（→［４］）の概念が介在していることが多い。

［２・４］　コイネー，リングア・フランカ

古代ギリシアにおいて，アテナイの言語は，ギリシアの共通語であったが，アレキサンダー大王が地中海世界を制覇してより，その世界に属する異なった言語を有する人々の間でも，商業語・行政語として用いられた（コイネー）。

また，14・15世紀頃から20世紀初めにかけて，地中海沿岸で貿易に従事する人たちが使っていた，フランス語・イタリア語・スペイン語・トルコ語・アラビア語・ギリシア語などの混成語をリングア・フランカと呼んだ。(1)

これら，コイネーやリングア・フランカという呼称を，広い意味で，異なった言語を用いる人々が共通に用いる言語にあてることがあるが，歴史的事実をどのように把えるかによって，派生した二次的な意味が異なってくる。それぞれの言語の接触の仕方もまちまちであるので，商業語・行政語・通用語など，その機能に即した呼称を用いる方がよい，と考えるが，次に，その言語の接触について考えてみたい。

［３］　言語の接触

地球上に現在存在する言語は，三千五百とも八千とも一万とも言う。(2) さまざまな形はあるものの，ヒトはみな音声言語をもち，同じように機能させている。それは，ヒトの祖先が一つであることに因るようであるが，音声言語という形態は一つの所から出て来たのであっても，言語の祖が一つということにはならない。と言っても，それは，鳴き声と言語の境界線をどこに引くかの問題にすぎないであろうが，少なくとも，たとえば日本語のような膠着性の強い言語と英語のような屈折性の強い言語を並べてみるだけでも，祖が同じというようには見えない。鳴き声であるのか一語文的な音声であるのか，まだ分節した言語にはなっていない段階で各地に散らばった集団の〈声〉が，複雑な文に分節する時に，膠着語とか屈折語とかの発想の違いが生じたものであって，複雑に分節した段階を言語の祖と考えるならば，複数の祖があったということになる，というように私は言語の祖を想定している。

同じ言語を祖とする集団が，その居住地を四方に広げていく時，その境界は，海や山や河な

どの地勢的条件・草原や密林などの植生的条件・猛獣や毒蛇などの生物的条件などに関係し，湿地や寒冷地のような地理的・気候的に生活条件の悪い所も境界になりやすく，そこに言語の境界も生じる。

そういった境界に隔てられて，各集団の言語はそれぞれの内部で発達していったのであるが，遠く離れた地に起こった全く系統を異にする言語が，山や海を越えて接触することがある。

原初的な段階では，それは，獲物を追って行動範囲を広げたり移動したり，また，気候の変化によって居住地を変えたりしていくうちに，先住民である他の集団とぶつかることによって起きる。いずれにしても，移動の原因は，さし迫った生存の問題である。この時，接触の起こった地に食物その他生活物資が豊富にあれば，先住民が新来者を受け入れて共存することができるが，そうでない場合は戦いが起ころう。共存した場合にも，一方が他方を征服した場合にも，どちらかの言語が主となって他は影響を残すことになるが，文化的に優れた集団の言語が主になりやすい。

集団とその帰属意識が固まり，また，国家が形成されて，その二者の間に交流がかわされる時には，まず，経済的・文化的な分野がその中心となるが，それらは集団や国家の政治的なおもわくと絡みやすく，時には軍事的な問題をひき起こすこともある。ここに至って，言語は，集団や国家の利害や勢力拡張のための道具となることも起きてくる。

(1) 経　済

二つの集団・国家の間で，物々交換をはじめとして経済的交流が行なわれる時，そこで使用される言語は，交易の行なわれる地点の属する集団・国家の言語であるか，あるいは，経済的に優位な集団・国家の言語となり，そこで交易に携わる人々は，二言語使用者となったり，言語的に優位の集団・国家の人々も，もう一方の言語から多少の影響を受けたりする。

さらに，経済的に勢力のある集団・国家と交易する複数の集団・国家の間での交易もまた，勢力のある集団・国家の言語を使用するのが便利であるため，その言語によって行なわれていき，互いに交易のある集団・国家のグループの中で，経済的に勢力のある集団の言語が，商業語・通用語となっていく。

(2) 文　化

農業や工芸・工業の技術や種々の知識の伝播する時，それを伝える人々は新しい集団・国家に同化する場合もあり，また，受け入れる集団・国家が自らの言語や風習を捨てて，文化的に優れた集団・国家の言語・風習を真似ることもある。この場合，少くとも伝播する文化に関する用語は，元の集団・国家から新しい集団・国家に伝わることになる。

文字や思想や宗教など，言語に深く関わる文化が伝播する場合には，とりわけ，言語への影

響が大きく，日本が中国から思想や文字を吸収した時のように，文化を受け入れる任にあたった人々（この場合は，為政者や官吏）がまず二言語使用者となり，やがて日本語の音韻・語彙・文法に大きな影響を残すことになったような例もある。

音声言語は，他者に何かを伝達する方法であった。文字言語は，ものの区別やもの覚えのための目印から発達した，記憶の方法・記録の方法であり，やがて，伝達の方法ともなっていった。

音声言語が，もともと音声の届く距離で用いられ，声や表情を伴ない，情緒的なものを常に含んでいて，それらに支えられたところにこそ成り立つものであり，公的な性格のものになるほど，その内容と論理性が求められるものであるのに対し，文字言語においてまず重要視されるのは，その内容と論理性である。

文字言語の浸透している社会では，日常生活の中で文字に触れる機会が多く，知らず知らずのうちに，人は書き言葉から得た語彙や表現を話し言葉の中に取り入れている。

文字をもつことで，言語は一定の形をもちやすいため，文字言語にひかれて音声言語の変化の速度がゆるやかになったり，広い地域において同じ形の言語を保つことも，可能になる。

そしてまた，文字は，思想を表わしたり広めたりする，有力な手段ともなった。

記憶しておきたいことがあるというのは，その集団の社会が複雑化しているからであり，また，文字をもっている社会は，文字をもっていない社会に較べて，より複雑な文化を展開することができる。そして，一般に，文字をもっている集団は，政治的・経済的・軍事的にも，より高度に発展している集団でもあった。

それ故，文字を受け入れる側は，文字を伝える集団の影響をいろいろな方面でも受け，こと言語に関しても少なからぬ影響をこうむることになる。

文字が伝わった時，その文字を参考にして自らの文字を新しく考案する場合と，その文字をそのまま受け入れて自らの言語の表記法とする場合がある。

後者の場合，表音文字や同じ系統の言語の表意文字を受け入れる時には，表音文字を，自らの音韻に合わせて文字との対応を考えたり，表わしきれない音韻については表記法を工夫したり，文字に多少の改変を加えたりすることによって，自らの言語に合わせることができる（受け入れる側の誤解によって，文字と音韻の対応が変化することもある）し，表意文字に，対応する語をあてはめ，表わしきれない部分を工夫・改変することによって，自らの言語を表記することができる。これらの場合，文字を伝えた集団の言語的影響は，比較的小さくてすむが，全く異なった系統の言語集団から表意文字を受け入れる時には，音韻体系・語彙，とりわけ文法構造の違いを克服する必要が出てくる。たとえば，漢字を受け入れた日本語のように。

文化の中でも，言語に大きな影響を与えるものの一つが宗教である。宗教は，人々の精神的な絆となり，人種を越え，民族を越えて広まっていき，そこに精神共同体が形成されていく。その時，聖典の書かれている言語も広まり，それを宗教語として受け入れるだけでなく，人々がその言語を集団の共通語，さらには母語とすることも起きてくる。自らの言語の書記法をもたない言語においてその傾向は著しいが，とりわけ，大国の消長の激しく，支配者がたびたび変わったり，集団が分断されたりする地域では，自らの精神の拠り所とその言語を守ることで，集団を維持しようとする働きが生まれやすい。

一方，カトリック教会のように，現地に溶け込み，現地の言葉でキリスト教の教えを説く方針をもって，普及に努めた場合には，その用語などは伝わることになるが，この現地の言葉で教えを説くということが，近代ヨーロッパにおいては，民族語を尊重する起動力にもなっていったことが注目される。

(3)　政治・軍事

経済的交流・文化的交流が平和裡に行なわれる時には，人々は自らの立場・相手の立場を大切にした上で，自らの欲するものは採用し，欲しないものは退け，取捨選択することが可能である。時には，自らの言語を捨てることすらいとわない。

また，国と国との間に政治的な均衡が保たれ，友好が結ばれている時，両者の間の外交は，通常，通訳を介して行なわれるが，かつてのフランス語のように，周囲の国々に強い影響力をもつ国の言語が，外交語・社交語となる場合もあり，近年の英語のように，それが商業語となるだけでなく，航空関係では世界的に用いられてもいて，工業・医学その他，先進的な種々の部門においても世界的な広がりをもって通用している言語が，外交の場面で使用されることもある。

また，国際的な機関においては，定められた，いくつかの公用語を使用している。

経済的交流・文化的交流に政治的な力関係が入り込んだり，国と国との政治的な均衡が破れたような場合，いろいろな方面で，小国は大国の影響下に置かれることになり，言語も大なり小なりその影響を受けることになる。

そこに軍事的な力が加えられ，小さな集団や小国が大国の支配下に置かれることもある。その時，行政語は大国の言語が使用されることになるが，一般民衆の日常語はもともとの民族語であって，必ずしも大国の言語に同化するとはかぎらない。

大国が同化政策の一つとして，その言語を学校で教える時，人々は，学校語（教育語）と日常語の二言語使用者になるが，その社会の中では支配者の言語に上達することが社会的に有利であることが多いため，その言語（支配者の言語）を，自らの主要な言語とする人々も現われ，世代を重ねるにしたがって，支配者の言語に同化していく場合もある。

その一方で，自らの言語を子孫に語り伝えて，民族の意識をより一層固めていく人々も存在する。

以上，見てきたように，集団や国家が接触する時，言語に影響が生じるのは，集団・国家の間に，経済的交流・文化的交流・政治的交流ないし政治的支配などの接触のあることが多い(同じ地域に居住していても，思想や宗教を異にして交流のない集団の間には，直接の影響はないながらも，建造物や風習に関する用語は，知識として伝わる場合もある)。

それらが友好のうちに行なわれる時には，異なった言語から語彙を受け入れる場合もあれば，自らの言語を捨てて文化的に優位な集団の言語に同化する場合もある。また，商業語・通用語・外交語・社交語・公用語のような，集団同士の間で共通に使われる言語をもつ場合もある。この場合，同じ言語を母体としてきた集団の間に分裂が起こったとしても，それは，自らが受け入れるか否かの選択をした結果ということになる。ただし，集団の指導者や国家の為政者の意志であって，それが民衆の意志を反映したものであるかどうかはわからない。

そこに政治的な力関係・支配関係が生じた時には，優位者の強制的な力が加えられることが多く，その影響や支配を受ける人々の痛みを伴うことも多い。それ故，行政・教育が大国の言語で行なわれる時，人々がそれに同化していく場合もあれば，民族の意識をより一層固めていく場合も生じる。

［４］　標準語政策

学校で習う言葉は，正書法の定められた，規範的な言葉である。つまり，書き言葉が中心にあって，公的な場面では，話し言葉もそれにもとづいたものが正格となるような，公式の言葉である。ここに，音声言語に対する文字言語の影響も生じる。

学校の起源は古いが，軍事目的であれ精神陶冶であれ，学校という所には必ず理念が存在する。人々の精神を一つの理想に向かって教育することが，設立者の願いである。古代スパルタの教育やヨーロッパ中世の神学に基づく教育が弊害を伴ったとしても，それは，理念を追求するところに必ず随伴する，普遍的な問題である。

近代国家においては，学校は，学校教育制度という機構のもとに，国家の統轄するものとなっている。したがって，学校教育は国家規模で行なわれるものであり，そこに用いられる言語は，国の中で統一されていることが望まれる。

学校教育制度が国家の推進するものである時，それは，国家の統一――国民の意志統一をめざすものでもあって，学校教育制度というものは，根本的に，極めて政治的な事態である。そしてまた，国家統一――国民の意志統一をするためには，言語を統一し，人間の発想を一つにまとめることが有効であり，行政上も便利であるから，学校という所は，言語統一をする

ための絶好の機関でもあるのである。

それ故，近代国家における学校教育政策は，標準語教育に裏打ちされたものとなるのが通例である。

以下に，西欧における標準語政策と，各地で行なわれてきた同化政策などについての概略をまとめる。

(1)　西欧およびその影響を受けた国

古代社会・中世社会においては，支配者は民衆の言語を知る必要もなく，被支配者たちは，土着の言語や身分ごとの言語を使用し，それぞれの地方の首長が，中央から派遣された行政官と土地とのパイプ役を務める形で，行政が行なわれていた。必要なのは，税や役などの行政に関する用語や，司法に関する用語であった。

中世には，教会や学術・行政・司法において，中世ラテン語が使用されていた。

近世になって，絶対主義国家が誕生すると，広大な国土・多数の民族を統一する方策として，まず考えられたのが，精神的共同体たる宗教の統一であった。そのうち，キリスト教のカトリック教会は，その普及のため，現地の言葉で教えを説く方針をもったため，一方に，民族語尊重の気運も生まれることになった。

19世紀になると，西欧には市民社会が成立し，貿易・商業の発達による資本の蓄積，植民地など広大な市場の確保，工業の発達，交通機関の発達などと相俟って，資本主義社会が興こった。この時，近代的中央集権国家の建設のために採られた方策の一つが，行政語の統一であり，それは，教会の言語を統一することと，学校教育の中で教育語を統一することに始まる，標準語政策として，全国に施行されることになった。

標準語と定められる言語の核は，首都機能の存在する地域の言語であったり，文化的に高い地域の言語であったりし，フランス語の場合はイル・ドゥ・フランスの言語であったが，ドイツ語の場合は高地ドイツ語で，ルターの新訳聖書の言葉が，そのきっかけになった。

ところで，日本は，ほぼ単一民族・単一言語で成り立っている稀な国家であると言われている（日本には，アイヌなどの民族の問題もあり，これについては，別稿にゆずる）が，世界の国々は，隣国と領地が接しているためもあって，古来，人々の往来が激しく，領土の出入も頻繁で，一国の中に多数の民族・多数の言語を擁していることが普通である。標準語政策のとられる以前には，民衆は，支配者の言語に必ずしも同化する必要はなかったが，ここに至って，自らの言語を捨てるか，あるいは二言語使用者となることを余儀なくされたのである。

ほぼ単一民族・単一言語と言われ，方言的差異しかないとされる日本に於いても，根本は同じであった。

標準語は，［２・２］に述べたような自然発生的な共通語とは異なり，国家によって規範と

定められた言語である。国家が小さく，その構成員の共通語が一つであるなら，それを整備して理想的な言語にまとめ上げるのに，あまり問題は起きにくい。しかしながら，地域共通語がいくつかあって並立している時には，そのうちの一つを標準語の基盤とすることになり，首都機能の存在する地域や文化的に高い地域の言語が選ばれることになる。その場合，他の地域の人々は，日常に用いる言葉と，公的な場面で使用する言葉の二言語を使用する（バイディアレクタル）ことになるのである。

中国においては，殷周合体して洛陽に本拠を構えた漢民族が，強大な力をもって周辺の民族を同化吸収して今日に至っており[(3)]，現在，北方語を基礎方言とし北京語音を標準音とする言語が共通語（普通話）となっている[(4)]。方言音は互いに通じないほどに異なっているが[(5)]，漢字と漢字によって書かれた書物の継承と普及が，広大な土地に居住する数多の人々を統べてきた，大きな原動力のひとつであろう。

しかしながら，莫大な量の漢字を覚えるには相当高度な能力が必要であるため，中華人民共和国では，識字層の拡大をめざして，初等教育における拼音表記の教育が行なわれてきたが，その効果に擬議も生じているようである[(6)]。

山岳地帯には，外部と接触していない民族もあるだろうと言われ，また，独立をめざしている民族もあって，今後の動向が注目される。

(2) 東　欧

西欧に絶対主義国家ができ，近代的中央集権国家が成立しても，東欧には，民族を母体とする国家は存在しなかった。

東欧は，ヨーロッパとアジア・アフリカの接点に位置し，古くより人々の移動が激しく，したがって，さまざまの人種・さまざまの宗教・さまざまの言語が行きかっていて，文化を共有する人々の集団が各地にバラバラに散らばっていたため，強力な団結力もなく，大国の支配に甘んじて来た。支配者がたびたび変わり，国境線も支配国の事情で引き直され，民族は分断され，そのたびに行政語も別のものを与えられるのが，東欧の歴史であった。

18世紀後半から19世紀前半に，民族の伝統と歴史を尊重するロマン主義がヨーロッパに起こり，民族意識が高揚して，民族語の尊重や民族主義音楽が興隆することになる。現地の言葉で教えを説いたカトリック教会の存在や，周囲の大国の支配を受け同化させられることに対する反撥もあって，民族はその意識を高めていく。そこで自らを他と区別する指標となったものが，文化・風習・伝統であり，とりわけ，宗教と言語であった。東欧の諸民族語がローマ字やキリル文字による書記法を得，教育語や行政語として使われるようになったのもこの頃である。

現在の国境も，1945年２月，英・米・ソの首脳のヤルタ会談によって定められたもの[(7)]であって，人々の意志を反映していない，作られた国家であるため，一層，民族同士の諍いも多くな

る。民族の言語を公的に使用することが許されない少数民族は，そのことだけでも，中央政府に対する反感を抱く。その対立の根柢に横たわる最も大きな民族の指標は，精神的絆である宗教であるが，さまざまの要因や利害とからんで，最近，とみにその対立が表面化している。

しかし，一方で，その居住地がひとつ所にまとまっているわけでもなく，そして，混血も多く，また，宗教も多様であるため，民族を截然と分けることが難しい状況もあり，しばしば変わる支配国の政策や言語に従っている方が生活しやすいという事情があったこともあって，民族語イコール自らの中心的な言語とは考えない人もある。

(3)　旧植民地

15世紀に航海技術や船・用具が発達したことが大きな要因となって，ポルトガル・スペイン・オランダ・イギリス・フランスは，アフリカ・アジア・アメリカに進出し，やがて植民地や通商基地をもつようになった。

植民地が独立するのは，多くは1945年以降のことであるが，新しい独立国はそのまま元の宗主国と経済的・政治的な関係を保っていることが多く，上流階級・知識層は元の宗主国に留学し，独立国内部の教育も元の宗主国の言語で行なわれ，元の宗主国の言語が公用語となっていることも少なからずある。

言語を民族意識の中軸に置く時，民族語を尊重する人々と元の宗主国の言語を尊重する人々との間に対立が生まれるが，それはまた，複数の民族より成っている国の場合，民族同士の対立を生じるきっかけとなることもある。

この旧植民地の中で，言語による摩擦の小さかった例は，シンガポールの場合である。太田勇氏の『国語を使わない国』[8]によれば，シンガポールには，19世紀の初めにはほとんど定着住民が居なかったため，固有の土着語がなく，イギリスは英語で統治することが容易であって，独立後は，英語中心であるおかげで，英語・華語・マレー語・タミル語の４つの公用語があるが，多数派人種（華人）と少数派人種（マレー人・タミル人）とが言語紛争を引き起こさずに済んだ，という。また，マレー語が公用語であるマレーシアの華人とは異なり，シンガポールの華人は，華語によってエスニック・アイデンティティを強調する必然性がないので，英語の普及がシンガポールの華人の分裂を食い止めた，という。そして，教育を受けた若い世代の華人の日常会話は普通話か英語に変わっており，将来はシンガポールの華人は，シンガポール式の標準華語か英語かのいずれかを母語とする集団になる，と氏は予想しておられる。

民族のあり方や，元の宗主国との関係，また，宗教その他のさまざまな要因との関わりによって，それぞれの独立国には，個々別々にいろいろな問題があるが，このようなシンガポールの例が，問題解決の参考にはなろう。

現在，インドでも，英語が公用語のひとつになっている。

かつて植民地であった国々では，宗主国の言語で行政・教育が行なわれていたため，現在もそれを公用語にしていることが多いが，それらの国々には，土着の言語が無数に存在し，自らの文字をもっていなかったため，宗主国の言語ではあっても，文字を識り，教育を受けることが，誇りである人々も存在した。

インドには古くから文字があったが，識字層が限られていたこともあり，また，民族も文化も言語もあまりにも多様であるから，人々がコミュニケーションに英語を用いることは，便利なことではある。

(5) アメリカ合衆国

土着の人々，ヨーロッパから渡って来た人，アフリカより連れて来られた人，世界各地から移り住んだ人，さまざまな人種・民族より成るアメリカ合衆国には，人々が入り混じって居住している地域と，人種や民族によって住み分けている地域とがある。英語（米語）によって行政や教育が行なわれてきたが，最近，初等教育においてまず民族語を教える所も出てきたという。

これは，アメリカ合衆国だけでなく，ヨーロッパにも見られる現象であって，多様性を認める方向に社会が進んでいることと，まず民族語教育をしないと，後の教育効果が上がらない，という切実な状況がある為である。

［5］ 母 語

以上，共同体の言語・方言と共通語・言語の接触について考え，標準語政策・同化政策，民族語・公用語などの歴史と現況の概略をみてきた。

［1］に述べたように，一般に，母語とは，「生まれて後，周囲の人が話すのを習い覚え，特別に学習したという記憶のないもの」と考えられているが，それは一体，どのような言語であるのだろうか。

ウルリヒ・アモン氏は『言語とその地位』[(9)]において，

> 「ある言語共同体の母語」というとき，ふつう当該の社会体系で活力をもっている言語体系を指す。しかし，そのような社会体系で活力をもたないにもかかわらず，同一言語の標準変種がこの表現によって意味されることもある（方言の話し手にとっての「母語の授業」）。

と述べている。

それは，標準語であることもあれば，全国共通語であることもあり，地域共通語であること

もある。民族語であることもあれば，また，言語系統（アメリカ合衆国で使用されている言語を，米語と言わずに，英語と言うような）であることもある。言語共同体の認定の基準・言語の体系の認定の基準が一定でなく，さまざまな要素をもちさまざまな段階にある諸言語を，どこで分類すればよいのか，という根本的な問題がそこにはある。

言語共同体の一員である一人の人間においてさえ，その言語は，年齢によって異なり，居住地によって異なり，文字を得たり知識が増加することによって異なり，その経験に伴なって変わっていくものである。以前に使っていた言語を忘れ，知識を忘れていくこともある。そのどこをとって，「私の母語」と言えるのだろうか。

いろいろな民族が入りまじって生活している地域では，混血もあり，また，社会的条件も多様であって，いくつかの言語を話す人も多く，どれを母語あるいは一次言語と称するかは，本人の考えによって異なる場合がある。二つ以上の言語を幼時に十全に習得したバイリンガル・マルチリンガルの人も存在するため，当人にとって，どちらが母語であるかという問い自体が無意味である場合もあり，社会生活を営む上で，社会的に優位の言語を母語であると言う方が有利な場合もあり，はなはだしい場合には，大国に支配されていて，支配国がたびたび変わった人々の中には，支配国が変わるたびに，その支配国の標準語あるいは行政語や，社会生活を営む上で有利な言語を，母語であると自己申請する人もあるという。

教育語と家庭語（民族語）が異なっていて，教育語を使って仕事についている人の場合，家庭においても教育語を使うようになっていき，それを母語と称する人もある（そこに生まれた子どもは，教育語の中で育ち，民族語を覚える機会がその後ない場合も多い）。

支配者の言語を公用語として与えられている少数民族の場合には，自らの言語を日常語として使っていながら，（言語調査などのために訪れた）外部の者には，「（自らの言語を）もう忘れた。」と言う人たちもあるようである。それは，滅びゆく民族・滅びゆく言語をどうすることもできない，悲しみと諦らめゆえの言葉なのだという。

このように，私にとっての母語とは何かも不確かで，それが方言をさす場合も共通語をさす場合も標準語をさす場合も，民族語をさす場合も，言語系統をさす場合もあって，基準がまちまちであり，人によっては，教育語や行政語や公用語などを母語であると自己申請する人も出てくるため，「母語」という語を使用するのは非常にむずかしい。

また，アメリカで生まれ育ち，米語を話していた日本人が，５歳の時に日本に来て，日本語を新しく身につけ，米語を全く忘れてしまう場合がある。大人になってから，異なった言語圏に住むようになり，元の言語を使わないでいる人の場合にも，これに近いことが起きることはある。彼の母語は元の言語なのだろうか，新しい言語なのだろうか。――このような例を考え合わせる時，「母語」という概念自体が，必ずしも，有効ではない場合のあることがわかる。

母語という語の使用（あるいは意義）が多様であり，母語という概念自体が必ずしも有効でないならば，どのような概念が有効であるだろうか。

「使用する言語」が何語と何語であって，そのうち，「仕事上使用する言語」は何語と何語であり，「家庭において使用する言語」は何語と何語であり，というように，各人の使用状況に従って分類項目を作って，必要に応じて分類すれば十分なのではないだろうか。

［6］ 世 界 語

母語という概念は，民族意識を高め，人々が一致団結する際には，中心的な役割をになう指標ともなる。

しかしながら，社会的に有利な言語を母語と自己申請したり，民族が大国の支配を受ける時には，支配者の言語を母語と自己申請するようなことも起きてくるものであった。これは，民族意識の裏返し，あるいは諦らめ，あるいは否定の上に立った自己申請である。

すなわち，母語という言葉は，民族語・民族意識という概念と深く結びついて使用されることが多いものなのである。

民族や国家の分裂・統合の激しい昨今，民族語の状況はどのようなものであるだろうか。

［4］に述べた，シンガポールの華人たちが，英語の普及によって，その分裂を食い止めることのできた例もあり，また，フランスのアルザス地方の人々も，アルザスの言語を捨てて，フランス語に同化しつつあるという。

> くり返し言うが，この方言が二十世紀末の現在，劇的なまでに衰退し，その存在さえも危ぶまれている。何しろ，「方言を話さなくても，アルザス人であるという意識は持てる」，と思うアルザス人が多くなっているのだ。つまり，方言がアルザス人の自己同一化の言語としての機能を失いつつある。
>
> （ウージェーヌ・フィリップス著　宇京頼三訳『アルザスの言語戦争』　訳者あとがき[10]）

これらは民族語の衰退も予想させるできごとである。

その一方で，最近，民族語と民族を尊重しようという運動も盛んである。［4］に述べた，アメリカ合衆国やヨーロッパにおける民族語の教育は，その現われである。しかし，それを強調しすぎても，集団をどこまでも細かく分類することになって，窮極的には個人にまで行きつくものになってしまう面ももち，その過程で外部や内部に摩擦の起きる可能性も常に含んでいるものであるので，できるだけ摩擦の起きない方法で行なわれることが望まれる。

ところで，標準語教育を徹底して行なってきたフランスでさえ，ミッテラン政権の誕生（1981

年５月）以来，少数言語を護る姿勢を打ち出した。それは，直接的には，マグレブ移民の受け入れに端を発した，内部の多様性の容認であるが，

> フランスの諸言語を育成することが何に役だつのか。この問いをなげかける人びとは次のことを忘れている。同じ理屈によって，ほかの欧州諸国がフランス語教育をおろそかにして，英語教育にのみ専心する危険性がある。（フランス諸言語文化に関する文化省報告書作成者，ジャン=ピエール・コランの発言。八五年八月八日付『リベラシオン』より）
> （アンリ・ジオルダン編　原聖訳『虐げられた言語の復権』[11]　訳者解説）

に見られるように，ほかの欧州諸国が英語教育にのみ専心することを恐れ，フランス語も通用語として生き残ることを期した，欧州諸国の中の多言語化をめざすものともなった。来たるべき欧州統合において，フランスが，フランス語が，覇権を握ることをめざしての，フランス語生き残りの方策でもあるだろう。またそれは，英語が使えなければ就職に不利になってきた世界の現状の中で，フランス国内において英語教育を奨励せざるを得なくなった，誇り高き国の英語教育正当化のための方策でもあるだろう。

現在，商業語や通用語としての英語の比重は，ますます大きくなっている。それは，イギリスで行なわれているものとは異なり，アメリカ合衆国で行なわれているものやその他の変種とも異なった，そのネイティヴ・スピーカーではない人々にも発音・語彙・文法のわかりやすい英語である。

政治・経済が地球レヴェルで考えられていて，人々の往来も激しく，ボーダーレスと言われている昨今，人々が共通に使える一つの言語があれば，どんなにいいことだろうか。その基盤になる最有力候補は，上に述べたような理由から，商業語・通用語の英語であろう。

お互いに交流のある人々・集団・国と国の間が問題であったこれまでの在り方とは異なり，地球単位でものごとを考えていく方向に時代は進んでいる。欧州統合のような形のコミュニティが他の地域でも考えられ，やがては地球全体に一つのコミュニティができ上がるだろう。昨今のマス・メディアの発達は，その動きを促進させる大きな起動力である。そうして，国家の概念は，これまでとは変わり，あるいはなくなり，民族あるいは方言集団を母体とした小地域の行政単位ができていくことも予想される。各々の民族の文化や言語を大切にした上で，その総ての民族の言語や地域の共通語の上位概念としての，人々がコミュニケーションすることのできる一つの言語，という新しい概念の言語を考えたい。

上述のような世界と社会を把えるために，最近さかんに使われるようになってきた用語が，global という語である。そこで，これからの“世界の人々がコミュニケーションをすることのできる一つの言語”を，「世界語 (global language)」と呼ぶことを提案したい。

方言などの変種を含んだ民族の言語や地域の共通語に対するのがこの世界語で，地域の教育・行政・司法などは民族の言語や地域の共通語によって行ない，外国語を学ぶような形で世界語の教育を受け，世界の人々と交流する入り口に立つことのできる，ごく基本的なコミュニケーション手段としての言語を，私は考えている。その言語は，アカデミーのような機関において，基準が設定され，修正が行なわれ，常に見守られつづけるものであらねばならない。

注

(1) 『現代言語学辞典』成美堂，1988，P. 366を参考にした。

(2) 外部との接触がなく未調査である言語もあり，一つの言語とみなすか方言とみなすかという，言語共同体の認定の基準・言語の体系の認定の基準が一定でなく，また，線を引きにくい面もあって，学者によってその数値が異なっている。

(3) 藤堂明保著『中国語概論』大修館，1979，P. 3

(4) 中国文化叢書１『言語』大修館，1978，P. 167

(5) (4)に同じ。P. 407

(6) 佛教大学助教授・黄當時氏より御教示いただいた。

(7) 高屋定國著『現代世界をみる眼』ミネルヴァ書房，1987，P. 17–P. 22

(8) 太田勇著『国語を使わない国――シンガポールの言語環境』古今書院，1994

(9) ウルリヒ・アモン著　檜枝陽一郎，山下仁訳『言語とその地位』三元社，1992，P. 186

(10) ウージェーヌ・フィリップス著　宇京頼三訳『アルザスの言語戦争』白水社，1994，P. 325

(11) アンリ・ジオルダン編　原聖訳『虐げられた言語の復権』批評社，1987，P. 235

［付　記］

中国の言語事情について，佛教大学助教授辻田正雄氏・佛教大学助教授黄當時氏にお教え頂きました。深謝申し上げます。

たなか みどり　国文学科

（1995年10月25日受理）